



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）



オナジマイマイ

校長 白石 亨

オナジマイマイをご存じでしょうか。

平たく言えば東京のどこにでもいるカタツムリのことである。このオナジマイマイの自由研究に取り組んだことがある。

今から40年以上前、自分が教員として初めて赴任したのは松江第三中学校だった。理科の新米教師として理科の授業は勿論のこと、科学部顧問と科学センターを担当した。たまたま科学部員が校庭の片隅でオナジマイマイを採取したことをきっかけに、その生態を調べることにした。学校は江戸川区内の市街地にあったが、当時は校舎の片隅や裏庭にはたくさんのカタツムリがいたのである。

だが、理科の教員ではあるものの、マイマイについてはまったくの素人である。さっそく部員が集めてきたオナジマイマイを観察すると、約20匹すべての殻が右巻きだった。種類によって右巻き、左巻きがあることを初めて知った。また様々なエサを与えたのだが、ニンジンを与えればウンチは赤くなり、ホウレンソウを与えれば緑となり、ジャガイモでは白くなった。部員たちは毎日エサをあげていたので、マイマイが大好きになった。

そんな12月、「先生、大変！大変！マイマイが死んじゃった・・」と悲しげな表情で女子部員が報告してきた。20匹以上のマイマイがまったく動かないのである。殻から頭を出さず、マイマイは微動だにしない。

・・でも大丈夫。マイマイは冬が来ると、殻の出入口に白い薄い膜を張って寒さや乾燥を防ぎ、越冬して生き延びるのである。生徒にとっては新たな発見や驚きがあった。部員たちは熱心にこれらの記録をとり、考察も加えて研究としてまとめ上げた。読売新聞日本学生科学賞に応募したところ、思いもかけない上位の賞の入選を果たした。部員たちは入賞を知り喜び合った。大好きなマイマイで賞が取れたことが嬉しかったのである。

生徒は、興味をもったもの、好きなものには、とても熱中することができる。

このことは授業においても同様だと思う。日頃から生徒が授業に興味・関心がもてるようにと、本校の先生方も様々な教材や発問を準備し、授業展開等を工夫しながら指導している。特に先月、10月は「校内研修会」「若手教員研修」等が立て続けにあり、忙しい中、先生方は創意工夫を図りながら研究授業に臨んでいた。

研究授業の中では、特に印象に残ったのが社会である。

授業のテーマは「アフリカ州の貧困」であった。なぜアフリカ諸国の人々は貧困にあえぎ、生活が豊かにならないのか。生徒一人ひとりが iPad タブレットを用いながら資料を集め、真剣に課題に向き合っていた。グループごとに机を並べ、意見も交換しながら貧困の理由を追究していた。その中で、ひときわタブレットのキーを黙々と叩き、熱心に書き留めていた男子がいた。そっと近づき、この男子に声をかけると、13個も貧困の理由を書き上げたという。男子は得意満面の笑顔だった。自分の力だけで探究してきた充実感がみなぎっていた。この男子生徒に限らず、クラス全体が調べることに熱中し、学習に向かう熱量がとても大きくなっていった。授業を参観していた自分にまで熱量は伝染し、ワクワクして胸が高揚した。

昔も今も、生徒は「自分のやり方で、自分の力で調べていくこと」が好きである。昨今の言葉を借りれば「個別最適な学び」であろうか。振り返ってみれば、そのことを知らしめてくれた原点は初任校での「オナジマイマイ」にあると思っている。マイマイが好きになり、好きだからこそ粘り強く自分たちの力だけで探究できたのだ。

教員として第一の責務は、生徒の学習に対する興味・関心を高めること、そして生徒自身が自分の手で学びに立ち向かっていく力を養うこと。これに尽きると思っている。